

松島

日の本に三つの景色の一という

道のおくなる 松島え今日おもいたつ
旅衣 着つつなれにし故郷を跡に三春
の馬やじや 勿来の関は名のみにて

振りし昔を忍ぶずり文字もそぞろに名
所を 記すよすがに里人を利布の菅菰

七布三布旅寝の姿浅香山憂きを白石白
露の萩の宮城野杖引いて 己が心のま
にまに瑞巖寺へぞと着きにける

黄金花咲く山遠く千賀の浦辺へ立ちい
出て 望む波間に朝日島 春ならねど
もたなびきし霞の浦の朝ぼらけ桜のな
にし塩竈も夏の茂りにみやしろをうず
む若葉の若浜や涼しき風の福浦のここ
へよる島すなどりを尼には惜しき女子
島共に語ろう恋の道 磯の苦屋の苦島
に塩なれ衣濡れ染めて立てし筵の屏風

島 隠せどうきな立つ秋の夜の長浜や
長からで沖の千島の痴話ごとに名残雄
島の霧がくれ籬が島にまたの夜の約束
堅き石の浜 網引の唄のひなめきて雁
金の山に便りのたまずさを松の黒崎冬
の来て積もる思いに身にしみじみと雪
の白浜小松島昇る朝日の大浜に波の鼓
の拍子に連れ立ち舞う振りの面白や
実に実に亀と鶴先に松が浦島竹の浦
岸の漣打ちよりて昔へ帰る常磐津の
松の栄えぞめでたけれ